

もうからないから伐らない・食われるから植えない 持続型林業を阻む二つの課題とは？

岐阜県立森林文化アカデミー

教授 原島 幹典

森林文化アカデミーのエンジニア科では、地域や現場で起きている様々な課題を自ら考え、改善に向けた努力ができる現場技術者や現場管理者を育成するため、日々実践的な教育を行っています。「森づくり実習」という専門科目授業では、一年間かけて、学生に植林から間伐まで、木材生産を目的とした人工林施業を体験してもらっています。

その中で毎年頭を悩ませているのは、植林を体験できるフィールドが見つからないことです。これは、近年の林業ではほとんど主伐が行われていないことと、主伐後に再造林されないケースが増えているためで、その理由は、山林所有者にとって、主伐しても採算が合わないことと、主伐後の更新(再造林)に意欲を持ってないからだと思われま

す。現在の木材価値を見れば、その気持ちは痛いほどわかります。手塩にかけて50年育てた木の値段が1本1000円にも満たず(原木市場)、それを切り出す費用が、同じくらいかかってしまうのが一般的なもので、差し引き0、つまり50年間かけて何の利益も生まなかったことになる訳です。本当はその森が今まで果たしてきた、水の貯蔵、空気の浄化、二酸化炭素の吸収など、多くの公益的機能に対する対価が支払われてもおかしくないのですが、その分は造林や間伐等、人工林の維持管理コストとして補助金や税制の優遇措置等としてすでに所有者に支払われているというのが、国の基本的スタンスでし



▲写真1 宮崎県延岡市の大面積皆伐跡地

ょうから、所有者とすれば愚痴をこぼす相手も無く、投資に失敗したことを悔やむしかないわけで、主伐や再造林に意

欲が起きないのはむしろ当然のことだと理解できます(写真1)。私達が植林体験をさせていただいた山の所有者は地域に住む方で、当初は主伐後に再造林をされるつもりだったが、一旦は植林をあきらめたとのことでした。それは二ホンジカが増えたため、植林してもすぐに苗を食われてしまうからだそうです。

しかし、今回は森林組合や県の地域担当者が努力され、苗に忌避剤を塗ることと、今後の施業についても補助金等を利用して出来るだけ所有者負担を軽減することを提案されたことに加え、我々アカデミーの学生達が授業を通じて植林作業をお手伝いすることも伝えた結果、再度造林される気持ちになってくださったと聞き、大変うれしく思いました。アカデミーの学び

が少しでも地域貢献に繋がったように思えたのです。学生にもこの話をしましたところ、大変喜んでくれました。実習の終了時刻になり、下山を指示したときに、ある学生は「まだ終



▲写真2 実習風景

わっていないから時間を延長してやりましょう！」などの積極的な提案が出るほどでした(写真2)。

さてここまでは美談ですむのですが、将来を考えると、喜んでいる場合ではありません。現に後日その現場に入ったとき、先端をかじられた苗木が散見され、忌避剤だけでシカの被害は防ぎきれないだろうと感じました。全国を見ても、広範囲でシカの林業被害が増えているようです。



▲写真3 剥皮被害

今までは聞かれなかった地域での「ヒル」による吸血被害も増加・拡大しており、鹿の繁殖と関連している可能性が指摘されています。また、シカの被害は苗木の食害だけではなく、立木の剥皮、角碰り被害も増えています(写真3)。人工林に限らず、天然林の被害も深刻です。九州森林管理局では国有林におけるシカ被害を、回復不能なレベルまで森林生態系が破壊されるおそれがあり、早急な対策が必要だと、シンポジウムを開いて訴えております。

私の出身地である東京奥多摩では皆伐後約10年後に表土崩落を起こし、水道施設が土砂で埋没し、復旧に多額の費用を要した例もあります(写真4)。更に、田畑の農作物被害は中山間地域の住民生活を脅かしています。



▲写真4 奥多摩表土崩落

おりしも戦後造林された人工林は主伐期を迎えつつあり、林業現場では集約化による低コスト安定供給体制を目指した体制作りが進んでいる今日の状況から、主伐後の更新について、それを阻むこの問題を、研究者をはじめ、様々な立場や分野の人が情報共有、議論、検討し、どのような方法で乗り越えて行くのか、まさに持続的林業経営が望まれている次世代に課された大きな問題を、目の前に突きつけられた体験となりました。